

ジャガイモと映画 ＜フライドポテト1（フレンチフライ）＞

Web ジャガイモ博物館館長 あさま かずお
浅間 和夫

11 コブラ（原題：Cobra）

1986年、アメリカ。監督：ジョージ・P・コスマトス。

ロサンゼルス市警のすご腕刑事“コブラ”（シルヴスター・スタローン）が、連続無差別殺人を引き起こしている凶悪なテロ集団に闘いを挑む映画であり、ポーラ・ゴズリングの小説『逃げるアヒル』を映画化したもの。

テレビ用日本語吹き替えに2種ある。私が見たのはカルビー等がスポンサーに並んでいたTBS版（火曜ロードショー、主役の声は羽佐間道夫）である。

犯行現場を目撃したために狙われることになったモデル（ブリジット・ニールセン）を警察が安全な所に移すための移動中にモンレモスという町のモーテルに立ち寄る。そこでモデルが山盛りのフレンチフライに真っ赤なトマト・ケチャップをたっぷりかけて食べるシーンが出てくる。

コブラが、「フレンチフライがおぼれている。ほどほどにしておけよ。フレンチフライだ、体によくない」と、忠告する。もちろん、犯人に内通している同行婦警が警察車の専用無線を使わず、公衆電話から移送先や現在地の情報をリークしていることも、しっかり目で確認しながら、...

アメリカではフライドポテトとは呼ば

ず、この映画のようにフレンチフライと呼ぶ。フレンチフライと言うから、フランスが発祥かと思われがちだが、ベルギーのロドルフ・ド・ワルサージュという人がベルギー東部のリエージュという所の小さな店で買って、帰り途に食べた、と書いたことからつけられたと言われている。

12 スーパーサイズミー（原題：Super Size Me）

2004年、アメリカ。監督：モーガン・スパーロック。

アメリカには太った人が多い。フレンチフライは多くの人に好まれ、食べ過ぎを忠告される人が少なくない。ジャガイモ“粉ふき”のカロリーはご飯の半分だが、油で揚げるフライドポテトは高カロリーとなる。

肥満の原因はマクドナルドにあるという裁判をきっかけに、監督が自分の体を使って本当にそうなるか、1日3食1ヶ月間マクドナルドの全販売品（ファーストフード）だけを食べる人体実験をしたドキュメンタリー映画である。

真偽のほどは判らないが、マックのフライドポテトはかなり長い間腐らないと書いたDVD「恐るべきフライドポテト」を出した人がいた。マックのジャガイモには時期により萌芽抑制剤（芽止め液剤）を塊莖



写真：フレンチフライ用品種

「ラセット・バーバンク」。「男爵薯」同様、19世紀アメリカ生まれの品種。オランダ生まれの「ピンチェ」も加わると長寿三大品種

に直接かけたものが使われている。日本ではこのポストハーベスト・アプリケーションのクロロプロファムことC-IPCを塊茎自体に散布することは許可されていない。この除草剤に防腐効果があるとは考え難いため、油に秘密があるのか？。油やマーガリンの「トランス脂肪酸」の人体への影響を問題にしている国もある。また、この成分が多いとフライドポテトが長持ちした、という話もある。

映画に戻って、モーガンがひと月試した結果はと言うと。体重は11キロ増え、体脂肪率11%が18%になり、そううつ、性欲減退、かなり深刻な肝臓の炎症を起こした。しかしこの結果に、カロリーの取り過ぎ、運動不足、性欲の個人的判断差、肝臓への因果関係が不明なことが指摘されている。

13 愛を読むひと（原題：The Reader）

2008年、アメリカ・ドイツ合作映画。監督：ステイブン・ダルドリー。

ベルンハルト・シュリンクの小説『Der Vorleser（朗読者）』を映画化したもの。舞台はドイツであるが、全編英語による製

作である。そのため登場人物名も 英語読みとなっている（ミヒャエル→マイケル等）。小説は松永美穂が翻訳し、新潮社から出されている。本の表紙にジャガイモによく似たものが描かれている。

1985年、第二次世界大戦後のドイツ。15歳の高校生マイケルは、気分が悪かった自分を偶然助けてくれた21歳も年上の女性ハンナと知り合い、いつしか男女の関係になる。ハンナはマイケルが本を沢山読む子だと知り、シャワーの前に本の朗読を頼むようになる。

真面目に路面電車の車掌をしていたハンナが突然姿を消してしまう。8年後、法学生となったマイケルは裁判所でハンナと偶然再会する。彼女は、昔ナチス親衛隊のもと、収容所の看守をしていたため、無期懲役となる。マイケルは離婚し、ハンナの最後の“朗読者”になることを決心し、彼女に朗読を吹き込んだテープを送り始める。服役している収容所を訪ねようとして、近くの村の食堂でフライドポテトとえんどう豆を添えたステーキを食べるシーンがあった。

実はハンナは読み書きができない女だった。模範的な服役をし、ついに出所できることが決まり、迎えに行くが...

14 羊たちの沈黙（原題：THE SILENCE OF THE LAMBS）

1991年、アメリカ。監督：ジョナサン・デミ。トマス・ハリスの同名ベストセラーを映画化したサイコ・スリラーの秀作。

若い女性を殺害しその皮を剥ぐという猟奇事件が続発。捜査に行きづまったFBIは、元精神科医の殺人鬼ハンニバル・レクター

(アンソニー・ホプキンス) 博士に示唆を受けようとする。司法訓練生クラリス(ジョディ・フォスター) は獄中のレクターに接触する。レクターはクラリスが、自分の過去を話すという条件付きで、事件究明に協力する。クラリスは、伯父が羊たちを屠殺するのを目撃したことがトラウマとなっていることを明かす...。

レクター博士が口枷くちかせを付けたままフライドポテトを食べるシーンがある。

アカデミー賞の作品・監督・主演女優・主演男優賞といった主要部門を独占した映画である。

15 『ドラゴンボールZ 神と神』(英語題: Dragon Ball Z : Battle of Gods)

2013年、日本の漫画アニメ。監督: 細田雅弘。「週刊少年ジャンプ」に連載され、海外でも人気を博した鳥山明のコミックが原作のアニメシリーズである。

かつて地球を消滅させるほどの力を誇った魔人ブウとの壮絶な戦いから数年経過。長い眠りから目覚めた破壊神ビルスは、フリーザを倒したというサイヤ人の話を聞き、孫悟空の前に現われる。

宇宙を管轄する界王の忠告を聞かずに久々の強敵に挑んだ悟空だったが、ビルスの圧倒的な力の前に手も足も出ずに敗けてしまう。さらなる破壊と伝説の戦士「超サイヤ人ゴッド」を求め地球へと向かったビルスの暴走を阻止するため、悟空と仲間たちが立ち上がる...

と言うものであるが、ここで取り上げた

のは、この アニメ映画「ドラゴンボールZ 神と神」とのタイアップキャンペーンとして、作品にちなんだオリジナル商品の販売を開始したからである。“ドラゴンボール形のスナック”や“スーパーサイヤ人を再現したフライドポテト”など、見た目にも楽しい商品を登場させていた。

16 スクワッド 栄光の鉄人軍団 (原題: The Siege of Firebase Gloria)

1990年、アメリカ。監督: ブライアン・トレンチャード・スミス。

米国製のヴェトナム戦争映画。安物の戦争アクション映画と見られがちだが、元海兵隊員のリー・アーメイが主演のみならずテクニカル・アドバイザーも務める優れものであり、無名の海兵隊員の寡黙な戦いが描かれる秀作である。

テト攻勢下、米軍の砦“炎の基地グローリア”は3万のヴェトナム兵に囲まれ、無線機が働かず、絶対絶命の危機にあった。この映画は、戦争のアクションとか兵士と下士官のやりとりもいいが、特にハフナー上級曹長役のリー・アーメイに惹かれた。そして、次のシーンもあった。

凄絶な戦いの中、孤立した陣地に友軍のヘリコプターが着く、

A「何をもってくるか？」

B「食糧、無線機、弾薬。海兵隊もだ」

A「フレンチフライも持ってくるかい？」

と、冷静な冗談。アメリカ人は、日本人のポテトチップ好き以上にフレンチフライが大好きなのだ。